

インドにおけるガンディー教育思想の継承

— ナイー・タリームの思想と実践の展開 —

河井由佳

(2014年10月2日受理)

Succession of Gandhi's Education Thought in India
— Development of Nai Talim thought and practice —

Yuka Kawai

Abstract: This paper aims to clarify the thought and practice of "Nai Talim (new education)" promoted by the people called Gandhian, and to understand Mahatma Gandhi's educational thought more deeply.

Mahatma Gandhi significantly influenced educational policy of India during the independent period. He criticized colonial education which strongly focused on the English language, and perceived "true education" as "every Indian citizen's independence". And he named new and true education "basic education".

"Basic education" which consisted of 7-years compulsory education and adopted "handicraft" as educational method and native language as instructional medium, was advocated at the 1937 All India National Education Conference. The most important principle of "basic education" is the concept of "self-supporting".

By cultivating "self-supporting", not only does education strengthen children's life capability, but it also promotes economic and mental independence of the India society as a whole.

Gandhi extended the framework of "basic education" to lifelong education in 1945, and established "Nai Talim. This education was emphasized the concept of self-supporting" in all the educational stages for rural reconstruction. However, the Indian National Congress government did not agree with "Nai Talim" because they attached greater importance to industry than to rural reconstruction. Gandhi died in January,1948. But Gandhian inherited the educational thought and practice of "Nai Talim".

This paper clarified Gandhi's educational thought by analyzing the thought and practice of "Nai Talim" after his death.

Key words: Mahatma Gandhi, Nai Talim, work education

キーワード：マハートマー・ガンディー、ナイー・タリーム、仕事教育

1. はじめに

インド独立運動の指導者であるマハートマー・ガンディーは、教育改革においてもインドに大きな足跡を残している。ガンディーは、1937年にセントラル・プロビンス州（現在はマハラシュトラ州）のワルダで開かれた全インド教育会議（All India National

Education Conference）において、イギリスによる植民地教育に代わる国民教育として「ベーシック・エデュケーション」を提唱した。この教育は、実際に利益を生み出す「生産的手仕事（manual and productive work）」を核として、全ての教科を関連付けて教えるという独自の方法をもつものであった。その後、「ベーシック・エデュケーション」は、国民会議派政権下

の各州の教育政策の中で、初等中等段階における7年間の無償義務教育として全国的に展開された。そして、「ベーシック・エデュケーション」に始まった「仕事」を取り入れた教育は、独立後のインドの教育政策の中で、生産性や技術の向上を重視する「職業教育(vocational education)」とは区別され、社会性の習得や自立、労働の尊厳を重視した「仕事教育(work education)」として初等・中等教育政策に取り入れられてきた。

後に、ガンディーは「ベーシック・エデュケーション」の枠組みを生涯にわたる教育として拡張すべきという見解に至り、「ナイー・タリム(Nai Talim)¹⁾」という新たな教育を提唱している。しかし、ガンディーの提唱した教育は、独立後の教育政策の中で「ベーシック・エデュケーション」の名称で定着しており、政策文書や報告書においては、この名称が使われ続けた。そのため、多くの先行研究において、ガンディーの教育思想は会議派政権下の教育政策として出された「ベーシック・エデュケーション」を中心として、初等・中等教育段階における国民教育や教育政策との関わりにおいて考察されてきた。

しかし、ガンディーとも面識があり、ガンディーの方針に基づく小学校の校長も務めたマジョリー・サイクス(1905-1995)²⁾は、「ベーシック」には、①時間的に最初である、②本質的なものである、③社会の一員として生きるための準備であるという意味が含まれ、「ベーシック・エデュケーション」として知られる7歳から14歳までの教育は「ナイー・タリム」の一部分にしか過ぎないと述べている³⁾。また、ガンディー教育思想の研究者であるM.S.パテルは、「ベーシック・エデュケーション」から「ナイー・タリム」への移行を「ベーシック・エデュケーションを生涯にわたるものとして拡張した新たな定義は、ガンディーの教育思想の進化を考える上で、重要な段階を示している。」としており、両者の違いと変化を明らかかなものとしている⁴⁾。また、この「ナイー・タリム」は、ガンディーの没後はガンディー主義者と呼ばれる人々によって現在まで継承されてきた。以上のことから、ガンディーの教育思想やインド教育への影響についての理解を深めるためには、「ベーシック・エデュケーション」や教育政策への影響だけでなく、「ベーシック・エデュケーション」から「ナイー・タリム」へのガンディーの思想の変遷や「ナイー・タリム」を継承してきたガンディー主義者たちの思想や活動も検討すべきと考える。

そこで本稿では、「ナイー・タリム」を「ベーシック・エデュケーション」の枠組みを生涯教育まで拡張した

ものとしてとらえ、まずは「ベーシック・エデュケーション」から「ナイー・タリム」の構想に至るガンディーの思想の展開について明らかにする。彼の思想の変遷については、インド政府編纂の『ガンディー全集(Collected Works of Mahatma Gandhi)』の第71～98巻に所載のガンディー自身の陳述を中心に分析を行う。次に、ガンディー主義者たちによって行われてきた「ナイー・タリム」の思想と実践を分析する。「ナイー・タリム」はアーマダバードやタミル・ナードゥなど各地のガンディー主義者によって継承されてきたが、ここでは、1936年から1948年まで、ガンディーが生活していたワルダールのセヴァグラム・アシュラムに隣接する教育施設⁵⁾の活動について明らかにする。とくにセヴァグラム・アシュラムの教育活動に深く関わっていたマジョリー・サイクスの著作を中心として取り上げて、ガンディー主義教育として受け継がれたものの特質について検討する。最後に近年のガンディー主義者たちの活動やガンディーの教育思想に関する中央や州政府の活動についてふれ、現代インドにおけるガンディー教育思想の意義について考察する。

2. ガンディー教育思想における「仕事教育」の変遷

(1) 国民教育としての「ベーシック・エデュケーション」の提唱

独立前の1935年にインド統治法が制定された。これにより議院内閣制が認められ、全11州のうち7州で国民会議派が政権を握った。会議派は、国民の大きな関心事であったインド人自らの教育政策を必要としたが、民衆が強く要求していた無償義務教育の実施に関しては、財政的な問題から立案が困難であった⁶⁾。そこで、会議派はその方法をガンディーに一任した。ガンディーはすでに政治活動の第一線から退き、主に『ハリジャン』⁷⁾への執筆活動を通じて、不可触民(ハリジャン)の地位の向上と教育を含めた農村開発計画に尽力していたが、依然として国政に関する影響力は大きかった。こうして、ガンディーの教育に関する見解が1937年にワルダールで開かれた全インド国民教育会議において取り上げられたのである。この会議には国民会議派政権の文部大臣をはじめ、多くの教育関係者が参加し、10月22日、23日の2日間にわたって行われた。会議の結果、次の4つの決議が出された。

①7年の無償義務教育が、全国規模で施行されるべきである。

- ②教授用語は母語とする。
- ③生産的仕事 (manual and productive work) を教育過程の中心に置き、すべての能力開発や訓練は、子どもの環境を考慮して選ばれた中心的な手仕事 (the central handicraft) に、可能な限り統合的に関連付けるとするマハトマ・ガンディーの提案を支持する。
- ④この教育システムが次第に教師の給与を賄うようになることを期待する。

中でも自立の概念を教育に取り入れることはガンディーが強く主張したことであった。会議の冒頭演説においても、ガンディーは「手の訓練を通して教育を行うというこの考えがみなさんに認められるかどうかを知りたい。この教育の効果は、どの程度自立できるかということにかかっている。7年後には子どもたちは、自らの教育費を賄うことができるよう稼いでいるべきである。」と述べている⁸⁾。冒頭演説においては、ほかにもガンディーの次のような言及がみられる⁹⁾。

「私は生徒の生産物によって教師の給与を賄うことを熱望している。なぜなら我々の何千万人の子どもたちに教育をもたらす方法はほかにないと確信しているからである。」

「教育を施しとして与えていることが子どもたちを無力にしていると閣僚たちに言いたい。自らの教育費を自らの労働によって賄うならば、子どもたちは自信と勇気をもつであろう。」

「我々は子どもたちを我々の文化や文明のもと、我が国の真の才能をもった真の代表者にしなくてはならない。それには自立の初等教育課程を彼らに与えるしかない。ヨーロッパは我々の手本ではない。彼らは暴力を信じているので、暴力に関わる計画を行っている。イギリスやアメリカは教育に大金を費やしているが、我々はその富のすべてが搾取によって得られていることを忘れていた。彼らは略奪の方法を科学的なものとし、高価な教育を子どもたちに施しているのである。」

ガンディーは、教育費を非暴力的な方法で賄うことや、子どもたちに自信と勇気をもたらすためにも自立の概念を教育に取り入れることを強調していた。しかし会議の決議においては、「次第に教師の給与を賄うこと」という具体的な目標も挙げられたが、あくまでも「期待する」程度のものであった。

(2) 自立 (self-supporting) への批判とガンディーの対応

ガンディーは、会議を振り返って「自立の概念をめぐる反対と批判は、私が言及した狭義なもの¹⁰⁾にまで集中した。したがって、会議は非常に慎重に決議しなければならなかった。」(下線は筆者)と述べている¹¹⁾。さらに1938年に開かれた国民会議派の年次大会(ハリプラ大会)の国民教育に関する決議においては、ワルダー教育会議決議の4番目の項目、つまり「次第に教師の給与を賄うこと」が削除された。ガンディーの言及においても、ワルダー教育会議までは自立についての言及が多く見られたが、会議以降ほとんど見られなくなった¹²⁾。

ベーシック・エデュケーションの特質の一つである自立の概念は、ガンディーによって強調されていたにもかかわらず、ワルダー教育会議やハリプラ大会において国民教育として国家の教育政策に取り入れられる際には、多くの批判や反対にあった。これらの中には偏見や誤解も含まれていたため、誤解を解くために説明することはあっても、ワルダー教育会議以降、ガンディーは自立の概念を自身の言及の中で強く主張することを控えた。しかし、ガンディーは自立の概念を教育に取り入れることをあきらめたわけではなかった。

ガンディーの言及において自立の概念が再び強調されるようになったのは、1939年以降のことである。この頃、ガンディーのもとには開始から2年目を迎えていたベーシック・エデュケーションの取り組みに関する報告が、各州から次々と寄せられていた。

ハリプラ大会の決議では、「この教育システムが次第に教師の給与を賄うようになること」という自立の概念における具体的な内容の項目が外されたが、実際の採択は各州に任されていた。そして、ベーシック・エデュケーションを取り入れた州のうち、ビハール州、ボンベイ州、セントラル・プロビンス州などでは自立の原理が導入されていた¹³⁾。

1939年10月には、ベーシック・エデュケーションの計画推進上の問題を話し合うために、ボンベイ州のプーナにおいて第一回全インド・ベーシック・エデュケーション会議 (the first All-India Basic Education Conference: 以下プーナ会議) が州政府によって開催された。各州からは、ベーシック・スクールの普及や教育・行政機関の設立などとともに、自立の取り組みの成果についても報告され、自立の概念も含めたベーシック・エデュケーションの進展が自明のものとなったのである。

この頃、ガンディーはワルダーの地方団体におけ

る講演で次のように述べている¹⁴⁾。

「過去数か月にわたってアシャ・デヴィ女史¹⁵⁾によって集められた正確な情報を分析した結果、この教育システムの経済的な効果が明らかにされた。それは我々の期待を越えたものだった。これが私の意味する自立の教育である。私が意味する「自立」とは、教育にかかるすべての支出を賄うのではなく、生徒によって生産された売り上げから少なくとも教師の給与を賄うことを意味している。ベーシック・エデュケーションの経済的側面は自明のものである。…ここに、4時間の糸紡ぎによって、子どもたちは30日で75ルピー¹⁶⁾稼ぐことができたという学校からの手紙をもってきた。もし30人の子どもが1か月間に75ルピー稼いだならば、全インドの初等教育学校に必要な数千万ルピーを稼ぐことがどれだけ容易に成し遂げられるかが分かるであろう。」

こうして、各州の取り組みの成果と経済的な効果という実証的な裏付けにより、ガンディーは再び、教育に自立の概念を取り入れることを強調するようになったのである。

(3) 農村復興のための「建設的プログラム」の推進と教育の枠組みの再編

ガンディーの陳述では、1940年以降に成人教育に関する言及が増えている。これはガンディーの「建設的プログラム (constructive programme)」の推進と関わっていると考えられる。「建設的プログラム」とはガンディーによって行われたインド独立のためのサッティヤグラハ¹⁷⁾運動の一部である。サッティヤグラハは、大衆による不正な法律に対する不服従運動として、南アフリカ滞在中にガンディーによって始められ、後にイギリスからの独立運動を中心とした非暴力的不服従運動を意味するものとなった¹⁸⁾。ガンディーによれば、サッティヤグラハは社会的・政治的な抵抗運動を意味するだけでなく、個人的な生き方の問題にも関わるものであった。個人やコミュニティーの改善点や努力目標を挙げた「建設的プログラム」も、社会的・政治的な独立のための不服従運動と同様に「真に非暴力的に自治を獲得する方法¹⁹⁾」であった。

1933年にガンディーは前年に始まった不服従運動を停止して「建設的プログラム」に専念し始めた。政治的テロ行為やイギリス支配に反対する人々の憎悪を伴う不服従運動はガンディーの求めていたものではなかったからである。しかし、ガンディーが執心

した「建設的プログラム」は、国民会議派の党員をはじめとする知識層には不服従運動ほど魅力的なものとしては受け入れられなかった。むしろ、無力で覇気のない、途方もなく非政治的なものと考えられた²⁰⁾。こうした見解の違いから1934年にガンディーは国民会議派を離脱することとなった。同年、ガンディーは全インド農村産業協会 (All India Village Industries Association) を結成し、農村産業の復興と農村の倫理的経済的向上のための活動を始めた²¹⁾。農村産業の復興は、ガンディーが重視していた不可触民制の撤廃にも深く関与するものであった。こうして「建設的プログラム」は農村復興のための活動に携わるガンディーによって、より具体化されていった。1940年8月にはガンディーによって13項目の具体的計画が挙げられ²²⁾、1941年の12月には5項目を付け加えた次の18項目が挙げられた²³⁾。①宗教の団結、②不可触民制の撤廃、③酒や麻薬の禁止、④カーディー (手織り布)、⑤村の産業、⑥村の衛生、⑦新教育、あるいはベーシック・エデュケーション、⑧成人教育、⑨女性、⑩衛生・健康教育、⑪母語、⑫国語、⑬経済的平等、⑭農奴、⑮労働者、⑯先住民、⑰ハンセン氏病患者、⑱学生

18項目のうち、ベーシック・エデュケーション、成人教育、女性、健康・衛生教育、国語、学生の項目で教育についての陳述がみられる。

「成人教育は国民会議派の人々に全く無視されてきた。無視されていない場合でも非識字者に読み書きを教えることで十分であるとされている。もし私が成人教育を担当するならば、自分たちの国の偉大さと壮大さに大人の生徒たちの心を開かせることから始めるであろう。…我々は村に蔓延する無知について理解していない。村人は外国の支配とその弊害について何も知らない。…私の意味する成人教育とは、最初は口伝による成人のための真実の政治教育である。」

ガンディーは、インドにおいて農村部の成人教育が疎かにされてきたことを批判し、成人には植民地支配の現状を認識するための教育が必要であることを述べている。また、女性は本来男性と同等であるべきであり、男性や女性の間違った認識を変えるためにも、教育や社会の根本的な改革が必要であると述べている。また、農村開発において、ガンディーが特に重視したのが、健康・衛生面での改善である。「健康と衛生の基本原則は単純なものであり、学ぶことも容易である。難しいのはその遵守である」として、「肉体労働と精神的な仕事のバランスを保つこと」「まっすぐに立ち、すべての活動をきちんと行い、これを自分

の内面の表れとすること」「同胞へ奉仕する生活のために食べること」「水と食べ物と空気は清浄にすべきであり、個人的な清潔さに満足せず、自分の望む三倍の清潔さをあなたの周りに広めること」などの具体的な活動目標をあげている。

こうして「建設的プログラム」で挙げられた成人教育への見解は、生涯教育構想としての「ナイー・タリーム」の基盤となった。

(4) 生涯教育としての「ナイー・タリーム」の確立

1944年に行われたヒンダスターニー・タリーミー・サンガ²⁴⁾の会合において、ガンディーは、ベーシック・エデュケーションの範囲を拡張し、すべての教育段階において手仕事を中心とした国民教育のプログラムを作成すべきであると述べた²⁵⁾。この会合では、農村産業の復興のためにも成人教育にカーディー²⁶⁾の生産を中心とした自立の概念を取り入れること、また、男女の平等な関係を理解し実践するなどの市民としての正しいあり方を教える必要などを強調している。翌年の1945年の1月11日から4日間行われたヒンダスターニー・タリーミー・サンガの会合は、200人を超える教育関係者が参加した大規模なものであった。ここでは、これまで「ベーシック・エデュケーション」と呼んできた教育を「ナイー・タリーム」という言葉に呼び換え、生涯にわたる教育とすることを宣言し、教育における自立の概念を強調したガンディーのスピーチが、主催者であるザキル・フサインによって読み上げられた²⁷⁾。

「我々の仕事の範囲は、今や7歳から14歳までの子どものナイー・タリームに限定されない。それは生命の誕生から死ぬ瞬間までの一生をカバーするものである。これは、我々の仕事が非常に増加したことを意味する。…我々の報酬はすべて、外部からではなく内部からのものでなくてはならない。…ナイー・タリームも外部の財政援助には依存しない。いかなる批評があろうとも独自の方法で歩むしかない。私は真の教育は自立であるべきだと考えている。」

講演では、「ベーシック・エデュケーション」という言葉は一度も使われることはなかった。以後、ガンディーは自らの教育思想について言及する際に「ナイー・タリーム」という言葉を使うようになった。成人教育を含む「ナイー・タリーム」においては、さらに自立の概念が強調された²⁸⁾。また、この頃からガンディーは、自立 (self-supporting) とともに、経済的自立をさらに強調した自立 (self-reliance) という

言葉を使うようになった²⁹⁾。

(5) ガンディーの孤立と「ナイー・タリーム」の停滞

ガンディーは「ナイー・タリーム」として生涯教育構想にまで拡張した教育の重要性を言及し続けた。しかしインドでは、分離独立を支持する宗教間の対立がおこり、国民会議派は「建設的プログラム」には参加せずに重工業を重視し始めていた。1947年4月22日にパトナで開かれたヒンダスターニー・タリーミー・サンガの会合で、ガンディーとサンガの委員長であるザキル・フサインとの間において、政府との見解の相違の中で計画をどう進めるかが議論されている³⁰⁾。そこでは、政府とサンガの活動を調整すべきか、あるいは自分たちで独自に進むべきかというフサインの問いに対し、ガンディーは次のように答えている。

「私にはかつてのような影響力はない。このことで政府を非難はしない。政府は機械産業を進めることとした。私が大臣であってもおそらく同様にしていただろう。しかし、私はネルーたちと事態について話し合っている。ヒンダスターニー・タリーミー・サンガの存続について話し合い、確かめなければならない。私を求めるかあるいは人々を説得するために私の言葉が使われるように祈っている。役に立たないと考えているのならナイー・タリームをあきらめるべきである。もはや私の役割は終わったと告げる人もいる。非暴力には従っているが今や立ち去る時が来た。彼らは私の言うことに耳を貸さないであろう。」さらに、フサインがガンディーに「ナイー・タリーム」について、大臣に説明すべきであったことを述べると、ガンディーは「今日、国民会議派の全体組織は崩壊しつつある。彼らは私の行いを理解していない。」と答えている。ガンディーの言及からは、「ナイー・タリーム」を政策として行うことにもはや諦めさえ感じられる。1947年の12月の講演では分離独立に伴う宗教間の紛争を嘆き、真理と非暴力の教育である「ナイー・タリーム」について、このような状況下では、成功が危ういばかりではなく、必死で尽力しているヒンダスターニー・タリーミー・サンガの関係者が放棄すれば、すぐに計画は崩壊するであろうと述べている³¹⁾。志半ばにして、この講演の1か月後にガンディーは逝去した。

3. ガンディー主義者たちによる「ナイー・タリーム」の実践

ガンディーの没後も「ナイー・タリーム」は、ヴィノーバ・バーヴェ³²⁾やアシャ・デヴィなどのガン

デー主義者と呼ばれる者たちによって受け継がれた。1950年から60年代にかけての「ナイー・タリーム」の運動は、州政府や政治的なものからの分離を主張し、教育政策とは別に、独自のベーシック・スクールを設立するなど、全体的に主流の教育システムの変革には無関心であった。一方で、教育政策における「ベーシック・エデュケーション」は、植民地時代の既存の教育組織と併存して整備されてきたため、国民教育としての全体的な構造の主流とはなれなかった³⁵⁾。こうして、ガンディーの教育思想は一部の者たちによって受け継がれ、周辺化していったのである。

ここでは、1949年からワルダールのセヴァグラム・アシラムの学校で校長を務めたマジョリー・サイクス の著作「The Story of Nai Talim³⁴⁾」を中心に上げ、ガンディー主義者たちによって実践された「ナイー・タリーム」の特質について検討する。

マジョリー・サイクスによれば、ガンディーは1942～44年にかけて投獄された際に、建設的プログラムのうち、特に健康・衛生と教育について考えを深めたということである。ガンディーは、これらを「スワラージ³⁵⁾のための鍵」であるとし、全国民に関わる問題であるとした³⁶⁾。こうして「ナイー・タリーム」は、子どもから大人までを対象として、インド人の大多数が暮らす農村において、健康・衛生のための教育を中心として整備されていった。

(1) 成人教育と就学前教育の相互開発

「ナイー・タリーム」が始められてすぐ、セヴァグラムでは、村の学校で働いていたシャンタ・ナルルカールという人物が成人教育の担当を志願した。ガンディーは、彼女に、村の中に住み、村人に奉仕するのではなく村人の自助努力を支援する教育者として活動を行うことを約束させた。すでに、ガンディーは村に小さな薬局を作り、不可触民を道路清掃員として雇用し、学校では給食を行うなど、村人の衛生や栄養に考慮した健康管理につとめていたが、更なる改善がシャンタに託された。

村の成人教育は、不可触民の地域も含めた村全体に行われることとなった。シャンタは不可触民の地域に赴き、栄養や衛生について調査した。飲料水に使われている井戸は汚く、伝染病の原因となっていた。そこで、清潔な水を確保することが急務の課題であると考えた彼女は、村人と話し合いを進め、最後には村全体の話し合いとなった。その結果、村人の相互扶助により、村中の排水施設および井戸が改善されることとなった。相互扶助の考え方は村人に支持され、生活協同組合店 (consumers' cooperative store) が作られ、

利益は村の福祉に還元された。さらに村人の共同出資で穀物銀行が作られ、弱く無力であった村人の自立と (self-reliant) 自尊心 (self-respect) を助長した。

すでに、ベーシック・スクールを通して、糸紡ぎと機織りに関しては村に紹介されていたが、チャルカ組合によって、成人教育のために村に新たに3台の機織り機が置かれた。糸紡ぎと機織りのほかに搾油やヤシ砂糖の精製などの村の産業も成人教育として開発された。このように成人教育では、特に衛生環境の良くなかった不可触民の居住地域を中心にして、村全体の相互扶助を促し、協同組合などを利用して、村人の経済的自立を支援するという方法がとられた。

一方で、「ナイー・タリーム」では、就学前教育が成人教育と深く関連付けて考えられた。ガンディーは1931年にロンドンに渡航した際にモンテッソリー学校を訪問し、その方法に大変関心をもっていた。当時、インドでもモンテッソリー・メソッドをとりいれた学校はあったが、ヨーロッパと同様の施設・設備が必要とされたため、都市部の一部のエリートのための学校や保育園となっていた。セヴァグラムの成人教育担当者であるシャンタは、就学前教育についても精通しており、モンテッソリー・メソッドや、フレーベル、レイチェル・マクミランの思想と実践をインドの村の教育に応用しようとした。親は子どもの物理的・情緒的・知的ニーズについて深く知るべきであり、親への教育は子どもの教育の第一歩であると考えた彼女は、就学前教育を成人教育と深く関連付けて考えた。成人教育を通じて、親が健康・栄養・衛生について理解した上で、子どもが清潔で健康に生活し、よい生活の方法を親から学ぶことが教育の基礎であるとした。また、教師は子どもを学校に連れてきた親に、子どもの健康や衛生について指導した。学校で衛生的な生活に慣れた子どもに合わせて、親は家庭での衛生について配慮するようになった。こうして成人教育と就学前教育を相互に開発するセヴァグラムの方法は全インドの模範となった。

(2) 地域改善の推進者育成のための中等教育と教員養成

インドの中等教育では、依然として英語教育が重視されていた。ガンディーは、英語の習得よりも先に、母語によって自国の文化と言語を学習すべきであると考えていた。そこで、「ナイー・タリーム」における中等教育 (ポスト・ベーシック・エデュケーション) においても母語による学習が優先された。

1947年には、初めてのポスト・ベーシック・スクールがビハール州に作られ、その後の2年間で12校が州

政府によって設立された。1949年にはグジャラート州でも学校が作られた。1947年にセヴァグラムに作られたポスト・ベーシック・スクールには、18人の生徒が就学した。学校の生徒たちは、一つのコミュニティーとして組織され生活を共にした。彼らは糸紡ぎで生計を立てるために最初の1か月間は、一日に6時間チャルカ（糸車）を回さなければならなかったが、2か月目には効率が良くなり、作業時間を減らして学習時間を多くとれるようになった。さらに、食料の生産・加工（農業、酪農、搾油）についての活動も始められた。生徒たちは、身近な地域や生活環境に沿った生産活動により、経済的自立の力を身につけていった。

また、生徒たちは地域の一員としての社会的能力も培っていった。生徒のコミュニティーでは、集団で生活する上での義務や責任、権利について学び、コミュニティー内での窃盗、口論、過失はすべて定例会議で取り上げられ、対処された。さらに、地域における実践も進められた。セヴァグラムのポスト・ベーシック・スクールでは、生徒は近隣の6つの村と深く関わりをもった。環境衛生局と協力して村のマラリヤ予防対策をたて、村の家庭でのDDTの散布を行った。また、村人が共同で作った穀物銀行の運営を支援し、成人のための夜間学校で働いた。また、チャルカ協会と協力して成人教育における糸紡ぎを推進した。1949年には、14名のポスト・ベーシック・スクールの上級生たちが、教師や教師訓練生とともにパキスタンからの難民収容キャンプに派遣された。生徒たちはキャンプに寝泊まりし、子どもたちを集めて学校を組織した。

1951年にセヴァグラムのポスト・ベーシック・スクールでは、搾油、ヤシ砂糖、養蜂などの手仕事導入され、農業、畜産の3年の課程が整備された。すべての課程が男女平等に開設され、女子学生も14名入学した。さらに、協同搾乳場がポスト・ベーシック・スクールの学生によって作られた。また、学校では、効果的な牛乳の産出方法や採光のためのオイルランプの改良、肥料の改良などの実学研究がおこなわれ、これらの成果は農村地域の発展に活かされた。

また、「ベーシック・エデュケーション」と同様に「ナイー・タリーム」でも教師の役割が重視された。1940年代から50年代の初めにかけて、教員養成・訓練所は、セヴァグラムの教育機関の中心に置かれていた。インド全土のあらゆる地方からあらゆる宗教に属する若い教師やベテランの教師が集まった。研究及び作業の上では男女は平等であった。教員訓練生は綿花を栽培し、糸を紡ぎ、布を織った。一着の服を作るために必要な糸と布を計算し、綿花の収穫量や必要な耕作地の広さなどを学んだ。そして、自分の手で有用なものを作る

喜びを経験した。さらに、訓練生は近隣の村の学校で、教育実習を行い、児童の指導に当たった。村の児童のためにキャンプを行い、共同で調理や掃除などを行い、親を招待して歌やダンスや作文などを披露した。

教員訓練生の多くは村においても優れた仕事をし、村人に信頼された。彼らの多くが、新たな教育技術だけではなく、農村に基盤を置いた教育理念も理解した。しかし、彼らは本来の出身地に戻ると多くの問題に直面した。実際の教育現場においては、古い教育に固執する上司や同僚の教員に反対され、訓練の成果を実行できずにいた。インドの多くの地方では、古い教育概念が新たな教育計画の推進を妨げていたのである。

(3) セヴァグラムにおける「ナイー・タリーム」の衰退

1951年にガンディーの弟子であるヴィノーバ・バーヴェによってはじめられたブーダグン（土地寄進）運動³⁷⁾は、社会改革運動としてガンディー主義者たちに大きな影響をもたらした。1957年には、セヴァグラムの「ナイー・タリーム」は社会改革と結び付けて進められるようになった。教育関係者の中にはこの「合併」を疑問視するものもいた。この数年の間にセヴァグラムの「ナイー・タリーム」は質の発展こそ見られたが、多くの者が期待していたように新たな地域へ展開することはなかった。また、この頃にはインドにおいて3タイプの学校が存在した。一つは貧しいものためのベーシック・スクールであり、もう一つは中流階級のためのハイスクールであり、さらには特権階級のためのパブリックスクールであった。このように下級の学校とみなされたベーシック・スクールを親は敬遠し、古いタイプの学校に子どもを通わせた。また、ポスト・ベーシック・スクールの卒業が大学の入学資格として認められないことを恐れた親は、ベーシック・スクールに通わせることは子どもから高等教育への進学機会を奪うことだと考えた。

1959年には、これまで「ナイー・タリーム」の推進に関わってきたガンディー主義者たちが他の仕事へ従事していった。ラダークリシュナは、牧畜についての知識や経験を寄与するためにガンディー・平和財団へ、マジョリー・サイクスはナガランドの平和センターへ、そのほかにも主要な役割を担っていた数名が他の部署へ移って行った。K. S. アチャルやシャンカル・プラーラル・パンデなどの数名の推進者が、アーナンドニケタン小学校の教育に寄与し続けたが、「ナイー・タリーム」は、もはやインドの模範としては見られなくなっていた。

1967年には「ナイー・タリーム」の中心的役割を担

い続けていたアルヤナカムが亡くなり、1970年にはその夫人のアシャ・デヴィも亡くなった。そして、1974年にはヴィノバの指示により、アーナンドニケタン小学校が閉校した。

4. おわりに

「ベーシック・エデュケーション」に始まった「仕事教育」は、現在でもインドの教育政策の中で推進されている。現行のナショナルカリキュラムでも、教育課程の一領域として「仕事と教育 (work and education)」が取り入れられ、教育制度改革の一つとして「仕事を中心とした教育 (work-centred education)」が進められている³⁸⁾。「仕事と教育」の手引書の冒頭には、インドでは、ミドル・アッパークラスの子どもの対象とした知育教育が重視され、生産階級の人々に対して排他的な教育が普及していることが、問題としてあげられている。このため、生産階級の子どもたちは進学を諦め、ミドル・アッパークラスの子どもたちは生産部門の知識や技術を得ることができないばかりか、生産的仕事を軽蔑するようになっていくというのである。そしてこれは、未だにインドの問題として残るカースト差別³⁹⁾を利用した植民地教育の悪しき遺産であり、この問題を解決するために、仕事と教育を結びつけた「ナイー・タリーム」は、ガンディーによるパラダイムシフトへの挑戦であると評価している。そして、現代インドにおいても、仕事と教育を結び付けていくことが重要であると述べられている⁴⁰⁾。

インド東部のビハール州では、独立期に作られた391校のベーシック・スクールを復活させる計画が州政府により進められている。この学校では「頭と心と手」の調和的発達を目的として、カリキュラムに紡糸、革製品の加工、農業などを取り入れている。さらに、これらの学校で指導できる質の高い教員を養成するために教員養成の見直しを図っている⁴¹⁾。また、インド南部のハイデラバードにある国立農村研究所 (The National Council Rural Institutes) では、農村開発の一つとして「ナイー・タリーム」を取り入れた高等教育の普及が進められている。

このように近年、中央政府や州政府によってガンディーの「仕事教育」が評価され、政策に取り入れられている。しかし一方で、インドでは、ガンディーの名声を利用し、政治的な思惑を含むパフォーマンスが多く行われており、これらの教育政策も本来のガンディー教育思想に基づくものではないとの批判もある。

それでは、ガンディー主義者たちによって続けられてきた「ナイー・タリーム」は、ガンディー思想を継承したものであるのだろうか。インド西部のアマダバード州のグジャラート・ヴィッディヤピートでは、農村開発のための農業や衛生学の研究を行い、「ナイー・タリーム」の学校を運営し続けてきた。そのほかインド全土に散らばるガンディー主義者たちの研究機関やアシラムでも「ナイー・タリーム」は続けられている。

本稿であげたセヴァグラムでは、1974年の学校閉鎖後も教育研究機関 (ナイー・タリーム・サミティー) が存続し、「ナイー・タリーム」の調査や研究が続けられてきた。研究者がナショナルカリキュラムの「仕事と教育」の編纂に関わるなど、インド政府にも重用されている。2005年には、ナイー・タリーム・サミティーにより、知育に偏った現在教育批判のもとで、代替的教育機関として、アーナンドニケタン小学校が再開された。小学校の現校長は、「ガンディーの時代の「ナイー・タリーム」はすべての教育段階と行政官・教員訓練所を含めた総合的のものであったが、今は幼稚園と小学校のみを試みとして行っているにすぎない。」として、ガンディーの「ナイー・タリーム」との違いを認識しながらも、正規の学校の基準であるNCERTや州の教育省のカリキュラムにガンディーの教育理念を取り入れた独自のカリキュラムを統合してシラバスを作り、現在の教育状況に合わせた「ナイー・タリーム」を実践している⁴²⁾。

近年、政策に取り入れられたり各地のアシラムで行われていたりする「ナイー・タリーム」のすべてが、ガンディーの教育思想を継承したものとは言えないかもしれない。しかし、教育における「知識」と「仕事」の二分化を、カースト間や富裕・貧困層の格差の原因として批判し、教育と仕事の融合を図ろうとする取り組みは、ガンディーの思想や実践に由来するものである。そして、問題解決のためには、ガンディーの理念や実践を単に再現するのではなく、アーナンドニケタン小学校のように、現在の教育状況に照らし合わせて「ナイー・タリーム」を実践していくことが、評価されるべきであろう。

今後の研究においては、ガンディー思想の理解をより深め、現在行われている「仕事教育」や「ナイー・タリーム」と比較して類似点や相違点を明らかにしていく一方で、現代インドの教育における意義や有効性についても検証していくことが必要であると考えられる。

【注】

- 1) ヒンディー語とウルドゥー語の合成語, 「ナイー」はヒンディー語で「新しい」, 「タリーム」はウルドゥー語で「教育」, すなわち「新教育」を意味する。『ガンディー全集 (Collected Works of Mahatma Gandhi)』では「Nayee Talim」と表記されている。
- 2) クエーカー教徒のイギリス人。1920年からガンディーの思想に関心をもち, 1945年にセヴァグラム・アシュラムを訪問した時, ガンディーに「ナイー・タリーム」の活動に誘われたが, 結局は彼の死後の1949年から教員養成所の校長として, 関わることとなった。その後施設設備や教育方法の改善に関わり, また, インド国内を回り, ガンディーの教育思想の普及に努めた。
- 3) Marjorie Sykes, *Foundations of Living*, Parisar, 1988.
- 4) M.S.Patel, *Educational Philosophy of Mahatma Gandhi*, Navajivan Publishing House, 1953, p.145.
- 5) 1936年にガンディーはワルダーにセヴァグラム・アシュラムを作った。このアシュラムに隣接して, 教育推進団体, 教員・教育行政官養成・研修施設, 小中学校, 高等学校等の教育機関が作られた。ワルダー教育会議以降は全国から見学者や研修者が集まり, 国民教育の推進拠点となった。
- 6) 義務教育の実施には巨額な財政を要したが, 安定した大きな収入源であった酒税は, ガンディーの指導による禁酒政策のため期待できなくなった。
- 7) 『ヤング・インド』を改称し1933年から発行された機関紙。
- 8) Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938, p.122.
- 9) Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938, pp.114-124.
- 10) ガンディーによる詳しい説明はないが, 教育費全体を自立によって賄うのではなく, ガンディーが熱望した教師の給与を賄うことと考えられる。
- 11) Collected Works of Mahatma Gandhi Online (以下CWMGと表記) , Vol.72, No.481, pp.374-375.
- 12) CWMGにおいて, 1937年10月23日の会議以降に自立の文字が出現したのは1938年の2月20日であった。その間の約4か月, 文書の中に一度も自立の文字は見られなかった。なお, 会議の前4か月の間には56個の自立 (self-supporting) の文字がみられる。
- 13) Hindustani Talimi Sangh, *Two Years of Work*, The Alahabad Law Journal Press, 1942, pp.39-63.
- 14) CWMG Vol.77 No.26, pp.18-21.
- 15) Asha Devi (1902-1970) 1936年にガンディーの教育活動を手伝うために夫婦でワルダーに移り住み, 「ベーシック・エデュケーション」「ナイー・タリーム」を推進した。各州からの報告書を分析したり, ガンディーの講演会を企画したりするなど, ガンディーの思想と実践をつなぐ重要な役割を果たした。ガンディーの没後はワルダーにおいて「ナイー・タリーム」の推進に関わるとともに, 国内外の大学や研究所において, ガンディーの思想についての講演を行った。
- 16) ベーシック・エデュケーションのシラバスによると, 教師の給与は一か月に25ルピーと考えられていた。ちなみに斧は一つ1ルピー, 作業台は10~40ルピーほどであった。(Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938, p.113)
- 17) サッティヤグラハとは, 真理を意味するサッティヤと把握や探究を意味するアグラハを組み合わせてガンディーが作った造語である。ガンディーは「真理」には平和や非暴力 (シャーンティ) の意味も含まれるとして, サッティヤグラハが真理と非暴力に基づく運動であることを強調している。(田中敏雄訳『南アフリカのサッティヤグラハの歴史』参照)
- 18) 1920, 1930, 1932, 1942年にガンディーは不服従運動の大きな闘争を起こしている。
- 19) M.K.Gandhi, *Constructive Programme*, Navajivan Publishing House, 1941, P.3.
- 20) 森本達雄訳, B.R. ナンダ著『ガンディー—インド独立への道—』第三文明社, 2011年, 308-515頁。
- 21) CWMG Vol.65 No.421, p.355.
- 22) CWMG Vol.79 No.122, pp.111-114.
- 23) CWMG Vol.81 No.621, pp.362-363.
- 24) ベーシック・エデュケーション推進のために1938年に作られた教育機関。インド教育協会。
- 25) CWMG Vol.85 No.216, p.149.
- 26) 手紡ぎ糸から作られた手織り綿布のこと。ガンディーはカーディーを普及させることで農村産業の復興をめざした。
- 27) 体調を崩していたため, ガンディーは参加できなかった。
- 28) CWMG, Vol.85.No.536, Vol.88.No.716, Vol.91.No.441, Vol.93.No.318, Vol.94.No.254, 367, 372, Vol.97.40, 139等に自立の語がみられる。
- 29) CWMG, Vol.87.No.453, Vol.88.No.716, Vol.94.No.372等。
- 30) CWMG Vol.94 No.365, pp.356-362.
- 31) CWMG Vol.98 No.39, pp.54-56.

- 32) Vinoba Bhawe (1895-1982) ガーンディー帰国後の最初のアシュラムに参加、その後アシュラムの中心メンバーとなる。ワルダー会議にも参加し、ザキル・フサイン委員会のメンバーの一人。手仕事を中心とした教育に関する理解者であり協力者であることが、ガーンディーの言及の中で繰り返し述べられている。ガーンディーの没後もワルダーのセヴァグラムにおける「ナイ・タリム」の推進に関わった。
- 33) National Council of Educational Research and Training “ *National Curriculum Framework 2005 Position Paper National Focus Group on WORK AND EDUCATION*” 2007, pp.3-6.
- 34) Marjorie sykes “ *The Story of Nai Talim*” Kanakmal Gandhi, 1998.
- 35) ヒンディー語でスワ（自分の）ラージ（統治）を意味する。「独立」や「自立」を意味すると同時に「自己統治」や「自己制御」すなわち「自律」を意味するものである。
- 36) Marjorie Sykes, *The Story of Nai Talim*, Nai Talim Samit, 1988, pp.51-54.
- 37) ヴィノーバは、地をもたない貧しい農民に土地を分けるよう、裕福な地主を説得するため、インドの地方を行脚した。
- 38) 2005年に国立教育研究所（National Council of Educational Research and Training : NCERT）が出したナショナルカリキュラムでは、1～10学年までのカリキュラム領域の中で、国語、第二言語、数学、科学、社会科学、芸術教育、保健体育、仕事と教育、平和教育をあげている。また、教育改革の一つとして、仕事を中心に置いた教育（Work-centred Education）をあげている。また、ナショナルカリキュラムは法的拘束力をもっておらず、カリキュラムの設定は各州に任されている。国立教育研究所では、これまでで4回、初等・中等教育カリキュラムのガイドラインとしてナショナル・カリキュラムの枠組み（National Curriculum Framework）を編纂している。
- 39) 原語は Brahminical-cum-colonial paradigm。植民地時代のインドでは、民衆の支配をスムーズに行うためにイギリス政府によってバラモンが重用された。こうして、元々は儀礼的なものであったカーストは、バラモンを頂点とした身分階級として強化された。
- 40) National Council of Educational Research and Training “ *National Curriculum Framework 2005 Position Paper National Focus Group on WORK AND EDUCATION*” 2007, pp.iii-vi.
- 41) Bihar to revive Gandhian schools soon. Hindustan Times, 2012-10-23.
- 42) 筆者は、2012年の9月10～20日まで、セヴァグラム・アシュラムに滞在し、月曜日から土曜日にはアーナンドニケタン小学校を訪問し、観察・調査をおこなった。本稿であげたインタビューは、アーナンドニケタン小学校校長スシュム・シャルマ（2012年9月13日午後3時、アーナンドニケタン小学校）に行ったものである。

【主要参考・引用文献】

- 弘中和彦『万物帰一の教育』明治図書、1990年。
- Gandhi, M.K., *An Autobiography*, Navajivan Publishing House, 1927.
- Gandhi, M.K., *Constructive Programme*, Navajivan Publishing House, 1941.
- Hindustani Talimi Sangh, *Educational Reconstruction*, 1938.
- Sykes, Marjorie, *Foundations of Living*, Parisar, 1988.
- Sykes, Marjorie, *The Story of Nai Talim*, Nai Talim Samit, 1988.
- Patel, M.S., *Educational Philosophy of Mahatma Gandhi*, Navajivan Publishing House, 1953.
- Varkey, C.J., *The Wardha Scheme of Education*, Oxford University Press, 1940.
- National Council of Educational Research and Training, *National Curriculum Framework 2005 Position Paper National Focus Group on WORK AND EDUCATION*, 2007.
- Collected Works of Mahatma Gandhi Online (<http://www.gandhiserve.org/cwmg.html> (2012年5月10日アクセス))